中京学院大学経営学会
研究紀要　第12巻
2004年12月発行

別　離　の　幸　福

― ラインホルト・シュナイダーの『バルコニー』 ―

神　谷　裕　子

はじめに
1．シュナイダーの生き方
1.1　社会のなかで
1.2　スキャンダル
2．故　　郷
3．のらくら者（Ein Müßiggänger）
4．ラサール・ビスマルク・シュナイダー
5．飛んで行け！（Fliege fort !）

はじめに

1957年の初め、バーデンバーデンのホテル・メスマーが取り壊された。ラインホルト・シュナイダー（1903～58）は前年の12月からこの年の３月までこの町に滞在し、少年時代をすごした生家が解体される過程を見守った。その後７月までウィーンで書きつがれ、11月に出版されたのが、ここに取りあげる『バルコニー』である。彼の生前世に出た最後の作品となった。

本書は、晩年に書かれた自伝的作品群の最後から２番目にあたる。自伝にとどまらず、地方の年代記、文化と歴史をめぐる考察や社会批評など、多彩な内容を含んでいる。それまでのシュナイダーの作品に見られなかったユーモアや軽やかさが際立ちながらも、底に流れる「メランコリーのなかの明るさ」[1] が特徴的である。「彼の最も美しい作品の一つ」[2]、あるいは「なぜ『バルコニー』はこれほど重要なのか」[3] といった高い評価がある。それでいて本書は、『覆われた日（1954）』と代表作の『ウィーンの冬（1958）』の影にかくれ、特別に論じられることは少なかったように思われる。内容を理解するには、地元の事情や広い分野にわたる該博な知識が必要なことが、その一因であったかもしれない。しかしここには、遺作の『ウィーンの冬』につながる、彼の最後の決意がこめられてはいないのだろうか。

すべてを語り終え、彼が最終章に残したのは「別離の幸福（172）」という言葉だった。この不思議な言葉にこめた感慨はどのようなものであったのか、本書全体から解明してみたい。

1. シュナイダーの生き方

ラインホルト・シュナイダーの生涯はすでに他[4]で紹介したが、本書は彼の生き方と大きく関係している。生家と故郷の歴史は次章以下に述べるので、ここでは彼の略歴と、晩年の大きな打撃であったシュナイダー事件の概要を見ておくことにする。

1.1 社会のなかで

ラインホルト・シュナイダーは、1903年南ドイツの温泉保養地バーデンバーデンに、ホテル・メスマーを経営する一家の次男として生まれた。第一次世界大戦（1914〜18）の勃発でホテル経営は行き詰まり、ギムナジウムではなく実科高等学校（オーバーレアルシューレ）を卒業した。大学進学は不可能だった。はじめは農業実習生として、その後兄のいるドレスデンに移って、印刷会社に勤務する。どちらの職場も彼の性向に適さず、経済的困窮も重なって、肉体も精神も消耗する一方だった。

このころ父が自殺。事業に失敗してホテルを売却し、母との仲も冷えていたのだった。知らせにうちのめされ、シュナイダー自身も自殺をはかった。それが未遂に終わると、以後は精神的な世界に生きがいを見出し、会社を辞めて、25歳（1928）で文筆活動に入る。

1930年代の半ば頃、ファシズムが社会を席捲するのと反比例するように、徐々にカトリックの信仰に復帰し、ついには信仰が彼の確信となった。ナチ政権のもと、ドイツは2度目の世界大戦（1939〜45）に突入していく。多数の作家が亡命するなか、彼は国内にとどまった。その理由を彼はこう書いている。

> 「わたしは国民とともにしか生きられない。わたしは彼らの歩む道を一歩一歩ともにしたいし、そう歩まねばならない。思想の理由から亡命する人たちを高く尊敬するが、自分がドイツを去ることは一度も考えなかった。それにまた、独裁に屈している国に、国外から精神的な働きかけをするのは、ほとんど不可能だということもわかっていた」[5]。

彼は、戦時下の国民と「祈りの連関」[6]を生きようとした。宗教的信念に基づいた著作は、大きな反響をよぶ。1941年印刷禁止処分を受けるが、盟友の努力で非合法出版を続け、また手書きや複写によって、作品は手から手へとわたっていった。被災した市民や前線の兵士から、膨大な数の便りが寄せられた。

大戦末期の44年11月、居住地のフライブルクへの大空襲で、シュナイダーが死亡したという誤まった情報が流れたことがある。各地のカトリック教会で、彼のために死者のミサがあげられ、プロテスタント教会では説教壇から彼について語られた。

もともと頑健ではないうえ、青年期の無理がたたって胃を病み、生涯その痛みから解放されることはなかった。戦時中も腸の癒着のため何ヶ月か入院を余儀なくされている。家宅捜索や聴取があり、ついに死刑も見こまれる反逆罪で告訴される。これは敗戦のため実現にいたらなかった。

ようやく迎えた終戦。シュナイダーは疲弊した国民に直接語るため、病後の身体で講演旅行をかさねた。遅れを取り戻すかのように、戦争直後のわずか2年で50をこえる著作の刊行

が記録されている。彼がどれほどドイツの贖罪と再生を願ったか、当時の著作にはその熱意があふれている[7]。戦争直後には、彼の功績をたたえ、2つの大学から名誉博士号が贈られたのをはじめ、数々の栄誉が相次いでいる[8]。「人間の尊厳の擁護者、野蛮に追われた無数の人々の救助者、歴史と文学の聳立した解明者、時代の確かな洞察者」[9]。フライブルク大学の学位記にあるこの言葉は、シュナイダーのこれまでの努力と、それを社会がどのように評価したかを伝えている。

1.2　スキャンダル

敗戦からわずか数年で、シュナイダーが再びアウトサイダーの立場に追い込まれたことをどう考えたらよいのだろうか。彼はほとんど外出せずに、誤解と中傷の嵐が通り過ぎるのを待たねばならなかったのである。彼が問題にしたのは、ドイツ社会全体の構造というより、個人の罪の自覚でありそこからの革新であった。どん底のいまこそ、国民が自分の過去と向きあい、良心の検証をする契機である。教会はそのための先頭に立ち、信者を導かねばならないはずだった。だが国際情勢の激変のなかで、人々は立ち止まって内省する余裕を失ってしまった。

45年8月のポツダム協定によって、米・英・仏・ソ連の4ヵ国によるドイツの分割占領と共同管理、首都ベルリンの分割管理が実行された。東ヨーロッパでは、この地域を解放したソ連が戦後も占領軍としてとどまり、各国に共産党政権を樹立させている。米英とソ連とのあいだの相互不信は、東西対立となってあらわれた。48年の西側の単独通貨改革、同年6月からほぼ一年間の長きにわたって続いたソ連によるベルリン封鎖。これらを経て、ドイツの西側管理地域では、キリスト教民主同盟を指導するカトリックのアデナウアー首相のもとで、49年ドイツ連邦共和国が誕生した。ソ連管理地区も、同年ドイツ民主共和国の成立を宣言し、社会主義陣営の一員となった。トルーマン＝ドクトリンとマーシャル＝プラン、対するにコミンフォルムの結成とコメコンの創設、力と力の応酬が繰り返され、ドイツは両者が直接対峙する境界であった。「赤い海に浮かぶ孤島」ベルリンはその象徴である。

米ソの対立は核兵器の開発・実験にも拍車をかける。49年にソ連は原子爆弾の実験を行い、世界第二の核保有国であることを認めた。西ドイツの国民は、東側各国が激しい弾圧によって政治的自由が奪われ、しかも最も厳しい弾圧を受けたのがSPD（社会民主党）党員であるのを目撃している。こうした状況のなか、東に対抗して社会の安定と復興に邁進する勢力にとって、何よりも過去の罪の認識と贖罪を訴えるシュナイダーは、現実離れした夢想家ととらえられたのだった。

東欧ではソ連があからさまな反カトリック政策を取っている。聖職者や神学者の多くが、シュナイダーに同調せずに反共産主義を唱えた。アメリカのカトリック倫理神学者たちは、「正義の戦争」において原水爆の使用は可能であると根拠づけた。また教皇ピウス12世は48年のクリスマスメッセージで、「防衛の義務」について述べている。教皇の権能を高く評価していたシュナイダー[10]には、メッセージを受容できないのは心苦しいことであった[11]。

彼はカトリック側だけでなく、軍備政策を肯定する新教の元監督ヴルムとも対立した。ヴルムはナチ政権下で精神病患者の殺害に反対し、ユダヤ人問題にも抗議したほどの人物で

ある。彼が新旧両派のキリスト教社会から孤立し、これら主流派の意見に反対の立場を明確にしたとき、「シュナイダー事件」の温床はできあがったのである。

事件の発端は、彼が東ドイツの作家ヨハネス・ベッヒャーと文通し、「我々の責任」と題する論文が、東ベルリンで発行されている雑誌『アウフバウ』の1951年3月号[12] に掲載されたことにある。ベッヒャーは亡命先のソ連から東独に戻ると、この国で最も影響力のある文人政治家の一人になっていた。論文のなかでシュナイダーは、西独の再軍備への動きに反対し、思想家による東西の対話を求めたのである。

実は49年にも彼は『アウフバウ』の「平和の対話」にかかわり、同誌に論文と書簡を投稿している。2年前に表立った論争にならなかったのは、冷戦による危険がまだ切実に感じられていなかったからであろう。状況を一変させたのは、50年の朝鮮戦争の勃発であった。東からの侵略の可能性が現実になったのである。同じ民族が争う戦場になる悪夢は、分断国家ドイツにも迫りうる危険に感じられた。

シュナイダーの主張は一貫していたにもかかわらず、今回は「シュナイダー事件」と称されるほどの凄まじい騒動を引きおこした。特徴的なのは、彼への批判が、再軍備そのものの是非よりも個人攻撃から成り立っていたことである。ナチ政権に抵抗した西独の作家が再軍備反対をわざわざ東独の雑誌に発表するならば、結局共産主義のプロパガンダに利用されることになる、この点に、思想ではなくシュナイダー個人を問題にする原因があった。

そこには第一に、彼の人格を疑問視することで、反対運動を弱体化させようという政治的思惑があったであろう。その背後には、ようやく平和を取り戻しても、国家が二分され、新たな対立の最前線で生活せざるをえない国民の、広範な緊張と不安、フラストレーションがある。とにかく物資不足と混乱のなかで、生活の基盤を作らねばならない。そんなとき、自らの罪を直視するより生きていくこと、しかもより豊かに生きていくことに必死だった人々は、彼の主張にある後ろめたさを覚えたはずである。そうした諸々の感情が、シュナイダーという一個人の作家に向けて噴出したように思われる。

虚偽の混じった中傷や非難が、カトリック系のプレスから次々と放たれた。「シュナイダーは共産主義者である」、「ロシアにポストを得た」など。たまらず彼が抗議すると、怪しげなもっともらしい反論が、さらにキリスト教系新聞に掲載された。新聞・雑誌社は彼の作品を断り、放送局は仕事をキャンセル、書店には著作が並ばなくなった。彼を擁護すべき友人たちでさえ沈黙を守り、シュナイダーも訪問を受けなかった。「恐ろしいほどの孤独」[13] のうちに、彼は何ヶ月も自宅に閉じこもっていた。その痛みは、「今わたしが耐えていることに比べれば、ヒトラーのもとに生きるのは歓喜である」[14] と言わしむるほどであった。

この暗黒の時期は一年以上にわたった。連邦初代大統領テオドーア・ホイスの尽力もあり、52年の10月に Pour le mérite の受賞が決定すると、再び風向きが変わったのである。翌年には彼の50歳の誕生日を記念して4巻本の選集が、さらにカトリック神学界の巨頭、フォン・バルタザールによる初のシュナイダーのモノグラフィー『ラインホルト・シュナイダー　生涯と作品』が出版された。55年ベルリンの芸術アカデミーの正会員への招聘、56年ドイツ書籍出版業平和賞受賞。座ることが苦痛で立ったままでしか執筆できないほど健康状態が悪化

しながら、彼は再び何かに取りつかれたかのように、各地への講演をはじめた。

この事件で彼が経験したのは、現在という時点の危うさ、移ろいやすさだったと思う。講演は盛況で著作も多くの売上を記録していたが、それは一夜にして変わりえた。同時代の市民社会のもつ限界も感じたであろう。国民は未曾有の体験をしながら、彼の語ってきたことを理解していたとは言いがたい。この事件で、彼は自分が理解されていないという感を強めた。彼と信仰を共有するカトリック系の雑誌から非難の的となったことは、どれほどの痛手になったことか。バルタザールの研究も、カトリック的世界観の枠組みのなかに彼を組みこもうするものであった[15]。

自らの信仰のありようは、彼が回帰したと信じていた「教会」の時流とは異なっていた。彼は作家を志した若いころを、頼みとするものを何ももたなかった出発点を思いおこしたにちがいない。確かなのは過去だけである。彼は歴史のなかの自らの歩みを検証するために、自分自身について直接語りはじめる。それが「永遠の王冠（53年）」からの一連の自伝的作品になった。

2．故　　郷

シュナイダーは解体のすすむホテルに入り、各部屋をまわりながら、思い出のバルコニーに出る。ここから外界に向いた彼の視線は、おのずとこの町、バーデンバーデンの歴史を回顧することになる。「この都市（die Stadt）の歴史なくして家の歴史は理解できない（40）」からであった。といって一直線に歴史が語られるのではない。もともと歴史は矛盾をはらみながら動くものである。第１章「刑を宣告された家」では、過去と現代を交差させながら、家の由来までたどり着く。

町は固有の性格をもった有機体として提示される。「威厳を保ちつつ実直さもしっかりと見せ、愚かさも装いに含み、…　悪行も上品さもみな飾りにしている。この町（die Städtlein）はそんな風に、いつも昔のままだ（18）」というように。

時代が変わり人は変わるが、わきでる温泉は変わらない。温泉はこの有機体を流れる血液である。そこで町のシンボルである湧泉の精（Quellengeist）を定数とすることで、それとのかかわりあいにおける人々の営みが、自然に対する意識を写しだすものとなる。湧泉の神性を敬った古代人、ローマ人やゲルマンの諸民族が、中世には聖俗両界の領主たちが、この一帯に争いを繰り広げてきた。

ほらふき医者パラセルズスは、湧泉を研究し、そこに東洋医学で言うところの「気」の力を認めたのだった。患者を宇宙と時代のなかの一生命体ととらえ、治癒は神からもたらされる秘蹟であると考えた彼の医術は、科学的データの総合として人間をはかる現代とは著しい対照をなす。領主との虚々実々の駆け引きを通して、彼は医学の原点を浮かびあがらせるトリックスターの役割を担っている。

庶民の温泉客の羽目をはずした騒ぎも、それを紹介するシュナイダーの筆致はあたたかい。彼は歴史の影も忘れない。異端審問はこの町でも行われた。三十年戦争（1618〜48）の荒廃から徐々に立ち直るが、「人間は賢明になればなるほど、自然への感謝を忘れがちになったよ

うだ（40）」。彼は母方の先祖フランツ・アントン・メスマーの功績に言及する。メスメリズムに名を残すこの医師は、自然・宇宙とのつながりのなかで人間を見た一人だったからだ。合理主義と自然の神秘への回帰が併走し衝突するうち、温泉の効能が治療に利用されるようになり、湧泉の精も再び脚光をあびるようになる。町は活気づき、新しい領主も振興に手腕を発揮した。ホテルやプロムナードハウスを備えた温泉地での保養が、近代の娯楽に変身していく。領主と住民との関係を、君主制主義者シュナイダーは愛顧と忠誠の交わりとしてユーモアをまじえて記録している。

フランス革命の後、富裕な支配者層が勃興し、市民軍を結成した。自由主義の抗争の時代に彼らも革命派を止めることができず、義勇兵たちはこの町を経由して前線に向かった。1848年の三月革命が失敗に帰すと、プリンス・ヴィルヘルムの指揮のもと、プロイセンから軍隊がバーデンバーデンに迫ってきた。フランクフルトの議会派が、多くこの町に立てこもっていたからである。革命をめぐるこの時代へのシュナイダーの視線は、住民としての生活実感から成り立っている。支配階級の思惑と庶民の期待・失望が交錯する。彼らの本音があらわれた数々の覗きからくりの歌をからめ、住民の経験した三月革命が立体的に描かれる。革命派の首領たち（詩人もいた）は、自由主義の理想を掲げながら内紛をくりかえし、政治能力を欠いていることが、民謡のなかであからさまに皮肉られる。住民はいつの時代も現実的である。革命派がいち早く逃亡してしまうと、住民も一変して入城するヴィルヘルムを仰ぐのである。

都市の歴史と家の歴史がここで交差する。バーデン大公国の官僚だったシュナイダーの曾祖父は、退職後この町に「メゾン・メスマー」を築いた[16]。かつての経歴にもかかわらず自由ドイツ派の逃亡者を匿っていた曾祖父とその妻にとって、メゾンがヴィルヘルムの宿舎に決められたときの驚愕はいかばかりであったか。恐怖が強ければ強いほど、プリンスが無慈悲な独裁者ではなく、人間味あふれた素朴な人柄[17]であると知った安堵・喜びは、深く心に刻まれたにちがいない。メゾンを去る際、「敵としてわたしは汝のもとに来た。次回は友人として再訪しよう（59）」と語ったヴィルヘルムへの感謝は、曾祖父たちからシュナイダーにいたるまで、一族に綿々と受けつがれる。メゾンは以後40年にわたる国王（皇帝）夫妻の夏の「離宮」となり、夫妻とメスマー家は君臣の交わりをこえた交流を続けることができた。バーデンバーデンは世界の保養地に躍進し、「大いなる時代」に入る。

シュナイダーは幼少時にそうしたヨーロッパ上流社会の輝きを目撃した。第一次大戦以降の市民社会の混乱と無秩序に苦しんだ彼は、その対極にある一族の輝かしい歴史を思いおこしたことであろう。その歴史は自分の代で終りを告げ、二度と再現されることはない。さればこそ、自分の誕生以前にあった国王との恩愛のエピソードは、思い出の核として理想化されたのである。それは想像上の産物であるがゆえに、いよいよ美しく懐かしいものとして彼の心に保持された。シュナイダー事件の記憶が生々しく残り、歴史の舞台であるホテルが解体されるこのとき、君主を中心としたかつての秩序ある世界は、戦後ドイツの中心を失った社会に対するアンチテーゼにもなりえるものだった。

しかしシュナイダーは声高に告発したりしない。彼の目や耳には、それとは異なる現実が、通奏低音のように響いている。魚売りが売り物のうなぎを皮ひものように側溝にたたきつけ

る音。長い格闘のすえ漁師に釣上げられた魚の目。ホテルに自作の絵を飾らせてもらった若い結核の画家。結局絵は一枚も売れず、彼はすべて引き取らねばならなかった。髪結いの老人は、医師になる夢にやぶれ、人生に挫折し、小さな猿と暮している。孤独を慰めてくれた猿は北国の寒さに負け、老人だけが残された。死ぬほど疲れて帰ってきた老女のまえに、住居にたどり着くために登らねばならない長い長い階段がそびえている。これらの現実は今も続いている。シュナイダーのまなざしは、視線の対象者と同一の地平に立った哀れみである。彼は、人間に限らず、被造物全体の生きていくことにまつわる辛さ・悲しみに、寄り添っている。

だからシュナイダーは、即物的な現代の趨勢にはとてもなじめない。彼が抗議するのは、歴史ある建造物を、交通の便のため、駐車場にするためといった理由で、あっさり取り壊してしまうような現代の政策方針であり、それを許容する現代人の心のありようである。彼はヨーロッパ各地に進行するこの現象をいくつも例示し批判する。それは読者に共闘を呼びかけるというより、孤高の訴えである。なぜなら彼は「古い世代の人間（50）」であることを自覚しており、姿を消す建造物とともに、彼自身の立つ場所も無くしてしまうという思いがあるからである。

3．のらくら者（Ein Müßiggänger）

ホテルメスマーと隣接して劇場がある。大道具主任アッカーマンの指図で、上演のために舞台装置が運びこまれ、前夜の陶酔の醒めた日中にそれらが搬出されるのを、かつてのシュナイダーは見ていたのだろう。アッカーマンは夢と現実のはざまを行き来する人物である。彼はいわば狂言回しのように本書に何度も登場しながら、シュナイダーに夢の後の現実を教えている。

シュナイダーが今立っているバルコニーは、「かつて世界にかかっていた（18）」歴史の舞台である。しかもそれは「想像上の場所（56）」であることを、彼は承知している。

彼にはバルコニーに死者が集まっているのが見える。その主役はやはり、ここに40回の夏をすごしたドイツ皇帝ヴィルヘルムである。まだプロイセンの国王であった彼が、この町で暗殺をねらう犯人に狙撃されたことがあった（1861年）。怪我の程度は軽かった。国王夫妻はバルコニーに姿を見せ、住民はたいまつをかざし、歓呼して国王の無事を喜んだ。このとき以来、バルコニーは皇帝と一般市民との接点になった。

ヴィルヘルムがドイツ皇帝に即位し、再び重大な生命の危機から脱して後、1878年に夏の「離宮」に戻ったときには、町をあげての歓迎が彼を迎えた。光の噴水、木々には提灯が下げられ、鐘や祝砲が鳴り響いた。名士たちの分列行進に、各地区からの合唱隊が続き、皇帝夫妻は心からの大歓声に包まれた。革命や暗殺や、これまでのすべてのわだかまりが消え、「国民の心に良き父親像が完成した（82）」のだった。共同体が皇帝を中心に一つになった瞬間である。読者はここに、祝祭の華やかさと表裏一体のはかなさをも感じるであろう。この晴れの場面が、慎ましいホテルにとって最大最後のときであり、これを凌駕することはもうなかったからである。

現代の読者が、そうした光景を自分のものとして実感するのは容易ではない。我々はあまりにも多くの複雑な歴史を経験してきた。対象に感情移入せず、距離を保つことも学んでいる。実は当時でも、国民の皇帝への感情は一律ではなかった。革命が失敗に終わり、故郷に期待できなくなった多くのドイツ人が新大陸に移住し、都市下層民は絶望的な状態で暮していた[18]。シュナイダーとて、それを承知している[19]。

『バルコニー』に描かれた光景は、シュナイダーの書割のなかの世界である。彼はこれが虚構・憧憬であることを自覚しながら、君主制の放った最後の輝きを再現しているのである。本書で、この場面の直後にアッカーマンが言及されているのは、―「この晩、灰色ひげの大道具主任アッカーマンには何の仕事もなかった（83）」― 劇場の休演を示すだけではない。これが舞台装置を必要とする人為的な出来事ではないこと、しかも一つの時代という芝居の最終幕であることを暗示しているように思うのである。

大団円であるゆえに、バルコニーにはこれまで時代を支えてきたすべての死者が集まっている。ヴィルヘルムを取りまく、ビスマルクをはじめとする重臣たち、彼らのひそかな感情が行き交う幕間劇もあった。創業者の曾祖父が皇帝夫妻に連なっている。家業を継ぎ、メゾンをホテルに拡大した祖父、自殺した父。このホテルに生まれ育ち、本書執筆の2年前に死亡した母。数ヶ月前に亡くなった伯母は、この影の集まりに最も新しく加わった。伯母は皇后を代母とし、同じ名をいただいていた。ここに働いてきた従業員の一人一人も忘れてはならない。集会はもうまもなく永久に幕を閉じる。シュナイダーは彼らがフィナーレを飾るのを見る最後の、そして唯一の観客である。

> 「かつてここに一人の少年が、くりかえし何時間も階段を急いで上り下りしながら、来るはずのない友達を待っていた。不幸せで、決して自分とは合うことのない家には、なじむことがなかった。お客や従業員の無遠慮な視線にさらされ、このホテルでは、我が家でもあるのに、まったくの一人ぼっちだった。生後すぐの10年間、実際にはほとんど父も母もなく、思いやりのないよそよそしい世界にゆだねられ生活していたのに、ここが自分の家であり、ここにしか帰る家はなかったのだった（60）」。

暗くなり部屋に戻ったシュナイダーに浮かんだ、幼いころの述懐である。彼は、絶え間なく人が出入りし、両親と落ち着いた愛情の通い合いが望めなかったこの家に、自分の居場所を感じていたのではなかったのである。生まれ故郷のこの町には、今もよそ者（Fremdling）であると感じている（33）。彼はどこにも帰属意識が持てないまま、町をあとにした。フリーの作家として独り立ちしても、ここに住むことはなかった。30年以上の歳月がすぎ、久しぶりに故郷に長期滞在したのは、皮肉にも生家の解体を見守るためである。

現実の場所になじめなかった彼は、書物の世界に自分の居場所をさがした。この町を離れたことで、一族の誇りある歴史は再認識され、彼の支えとなりえた。彼は求めていた一体感をそこに見つけることができたのである。

彼には父母、特に父に対する負い目があったのではないか。エルツ山地の出身でホテルマンとして修業した父と、ホテルの三女として何不自由なく育った母とは、気質も性格も共通するところがなかった。カトリックである母の一族に囲まれ、父だけがプロテスタントであっ

た。父はこの家でつねに他者（fremd）であった[20]のである。父は高校を卒業する次男に、自由に進路を選択させている。事業に失敗し、母も去り、父が自殺にまで追い込まれたころ、シュナイダーは遠い大都会にいて、自分のことだけで精一杯だった。とても父母のことを配慮する余裕はなかった。結果的に彼が見捨ててしまった家は、人手にわたった後、日々荒廃する姿をさらした。兄弟とも家業を再建することはなかった。彼ができるのは、せめてこの家の軌跡を語り、その最期を見届けること、いわば死に水を取ることだけである。彼が本書に「バーデンバーデンののらくら者の手記」という副題をつけたのは、自分が無力であったという思いからではないかと思う。それは彼なりの責任の取り方であった。

4．ラサール・ビスマルク・シュナイダー

シュナイダーはちょっとした脱線と称して（105）、ラサールとビスマルクの出会いについて述べている。ビスマルクはバーデンバーデンをたびたび訪れ、影の集会にも加わっている。それならラサールは？　全ドイツ労働者協会の会長でもある彼は、実は水面下で鉄血宰相とかかわっていた。二人の関係如何によっては、ドイツ史が別の道を歩み、ホテルの運命も変わっていた可能性がある、とシュナイダーは考えたかもしれない。しかしわざわざ一章を設けて、二人、特にラサールの思想と生涯について紹介しているのは、ただそれだけのためであろうか。

フェルディナント・ラサール（1825〜64）は、富裕な絹物商人の息子としてブレスラウに生まれた。彼は労働運動指導者・社会思想家として名高いが、20歳年上の伯爵夫人に同情し、8年に上る彼女の離婚訴訟に肩入れして、多大な努力のすえに勝訴している。訴訟の際にはユダヤ人の彼に対し、「あらゆる種類の中傷の水門が開かれた。執拗に組織的に、極度に犯罪的な手段を用いてまで、名誉毀損という毒が吐き出された例は、他にほとんどないほどである（118）」。それに加えて荒唐無稽なデマさえ。著作はドゥンカー社から出版されたが、「様々な留保はつけていたにせよ、なお1876年に[21]フランツ・ドゥンカーはラサールを友人と公言する勇気をもっていた（109）」と記すシュナイダーの脳裏には、数年前の自身の経験が浮かんでいたにちがいない。ラサールが傍らドラマにも手を染め失敗に終ったことは、シュナイダーに何がしかの親近感をよんだ可能性もある。彼もやはりあの事件前後にドラマの創作に専念したが、期待した評価を得られなかったからである。

ラサールのドラマの主人公、ジッキンゲンは語る、「目標を示すな、手段もまた／この世で目標と手段はあまりに錯綜し／つねに一方が他方によって変化し／手段を変えれば別の目標を生み出すのだから（115）」。この台詞には、ラサールの成功と挫折の鍵があるように思われる。

ラサールはヘーゲルの研究を通してヘラクレイトスに到達した。万物は永遠の生成消滅のうちにあるが、この生滅は相互に転化しあう相対立するものの緊張的調和によって、普遍の秩序を形成する。それならば、「上りも下りも同じ道であり、有と無は重なる。昼は夜への、夜は昼への動きであるにすぎない。これを人間存在に転用すると、名声と恥辱、成果と崩壊は必然的に同一になることが実証される（109）」。相対立する矛盾を携えたまま疾走したラ

サールの短い一生に、シュナイダーはヘラクレイトスの思想の体現を見たことであろう。

ラサールは単眼の革命家ではなかった。ユダヤ人という出自に苦しんだが、それを逆手にとってマスコミを挑発、集中砲火をあびつつ労働者の注目を引き、その弁舌によって彼らの喝采を得た。彼は歴史のなかで実現が不可能な要求は、真実と認めなかった。国を追われた民族の歴史意識から、めざす革命も、実際の政治やナショナリズムとの関連のなかでの実現を考えた。普通選挙権という第一段階の目標を明示しながら、マルクスが構想した体制の転換のような、究極の目標が何であるかは沈黙しつづけた。ここでラサールは、目標と手段という悲劇的な弁証法に屈してしまったと、シュナイダーは言う。歴史のなかで有効性を求めるなら、実情にあわせたラディカルな理念の改変が避けられない場合がある。すると今度は純正な理念を損なう恐れが生まれる。王権への武装闘争に駆り立てるがごとく、敢然と消極的抵抗を否定しつつ、労働者の理念に基づく国家の実現のためには、ラサールは王権の転覆ではなく王権と労働者の結束を考慮していた。だからビスマルクからの会談への招きに応じることを辞さなかった。ラサールとビスマルクはともに、ブルジョアへの嫌悪と、オーストリアを排除した連邦を建設しようとした点で一致していた。ラサールが労働者の選挙権の実現に尽くしたときには、ビスマルクは彼を利用することができた。いずれは「このアジテーターから有権者たる大衆をもぎ取り、自らの車につなぐ（121）」自信があったのである。結果的にラサールはジッキンゲンと同様に、自分の国（Reich）を構想しながら、「自分自身と国（Land）を刀の先で演じてみせる（117・121）」だけだった。

ラサールは定住地をもたず[22]、財産も家庭も築くことがなかった。別の女性問題で決闘を挑まれ、無造作に豊かな才能を散らせてしまった。彼の短い生涯をたどりながら、「天賦の才があり、怪しさや問題点も備え、歴史上の使命と虚栄心、真剣さと軽率さが交互にあふれ出す（119）」矛盾にみちたこの不器用な人物に、シュナイダーは共感をこめたまなざしを注いでいる。シュナイダーからすれば、ビスマルクも最終的な勝利者ではない。引退に追い込まれた宰相は、帝権を守りきることができなかったのだから。二人の協力が実現していたら、あるいはドイツ帝国はもう少し別の永続的な形を取りえたかもしれなかった。ラサールとビスマルクは、ともにヘラクレイトスの弟子として、「悠然と道を下っていった、上り道でもあるその道を（126）」。二人は互いに重なりあうものである。

万物流転の思想に、シュナイダーは書き継ぐ、「他者がやって来て、我々の努力の成果を破棄してしまうと知りつつも、我々は論理の筋道をあくまでも守り、我々に託された一事（das Eine）に取り組むべきなのだ（109）」と。「名声と恥辱、成果と崩壊」の循環を経験したのは二人だけではない。他ならぬシュナイダー自身に該当することに、我々は気付くのである。

5. 飛んで行け！（Fliege fort!）

作品冒頭に掲げられたグリルパルツァーのエピグラムには、「進歩」という題名がついていた。グリルパルツァーがアイロニーをこめて名付けたタイトルを削ったのは、抗議の意図であったのか。「もうまもなく、誰もが到達できないような／深淵は存在しなくなる／そうなれば世界には、重みのあるものは何もなくなってしまい／ただ軽さ（das Leichte）だけ

が残る」。この「軽さ」はホテルを解体したあとの空白（die Leere）であり、中心を失った現代の空虚さに通じている。

ホテル解体の過程を描く「家の受難（Passion des Hauses)」の章は、表題にキリストの受難（Passion）と同じ語を用いている。シュナイダーの家にこめた特別な思いが伝わってくる。家の解体は、年老いた獣がなす術なく屠られるかのようである。動員された機材、破壊される建物、ともに生き物の隠喩が用いられる。「長い首が大きくゆれ、無表情に開閉する口（146)」、「連結した筋肉を引きつけながら（146)」、「その顎は強力な鋭い刃で覆われている（150)」。対する「メゾンは、最期の苦悶（アゴニー）のうちに恂々と膝をついた。両眼はつぶれていた（154)」。彼にとって家は血の通う生命体である。

凄惨な破壊の場面のあいまに、近づく春の描写が挿入される。時とともに柔らかになる光や、冬の眠りから覚めつつある牧草地は、変わらぬ自然の営みを告げている。並列された場面は著しい対照をなす。こうした変わるものと変わらぬものとの対比は、次章以下かくれたテーマとなって、繰り返し登場する。

「訪問」の章には、今なお歴史あるゆかりの品々が、伯母（亡き母のただ一人存命中の姉）の家では悠然とその存在を主張している。だがそれも、女主人があってこそである。生活のの基盤を失えば、死に絶える運命にある。

2つの章で定冠詞のついた「見守る者・観客（Der Zuschauer)」とは、シュナイダー自身である。彼は観察し記録し、思い出の場所に別れを告げていく。領主一族のために建立されたリヒテンタール修道院。シスターたちは変わることなく世界を支え、何事もなかったかのように、700年の間休むことなく祈りが続いている。聖なる伝統をもつ場所は、彼の場所ではない。ここで彼は自分自身だと感じられないのだから（135)。ライン平野を眺望する葡萄山。ここにはほぼ30年前の出発のときにも訪れている。当時彼は勤めをやめ、作家となる希望を抱いてポルトガルに出発しようとしていた。かつてと今と、2つの出発の場面で彼は、この山にある、時代と歩みをともにしない小さな城のことに触れている。この城には象徴的な意味が感じられる。800年の歴史をもつ城は、長い年月時代と同調してきたが、ある曲がり角で歩みを停止したのだった。時代とともに歩めば視野は限定される。時代に距離をおくことで、失うものはあるが、見えてくるものがある。

家の解体を見届け、故郷をはなれるシュナイダーの心を占めていたのは、諦念だったのだろうか。そのように解釈できる箇所はいくらも見つかる。「次第に消え去っていく皇帝行進曲の響きがわたしを滅ぼしていく（171)」、「あと2・3週間恥辱をさらし、それでおしまいだ。時代もおまえ（家のこと：引用者注）もわたしも同じ道を行くのだ（84)」など。彼はバルコニーが姿を消していく過程を、忍従とあきらめの気持ちだけで見守ったのだろうか。バルコニーのあらわした時代の終りとともに、自分も消え去っていくつもりだったのか。だが「文学的生活」や「ドイツの文筆家」たちに別れを告げる決意はしても、「声」そのものであろうとすること（vox et praeterea nihil)、言葉への信頼はいささかもゆらいでいない（10f.)。「わたしはこれからも、ただ時代のなかの存在でありたい。持ちこたえよ、そして強くあれ（Perfer et obdura)、とりわけ今、人生の昼、人生の夜に（99)」。ここには諦念とは異質な

ものが宣言されている。

30年前の出発は、不可避の帰結だった。「到着するためではない。行き先はない。ただどうしてもそうしなければならないのだ（139f.）」。いま彼は再びあの歩みをとめた城を通りすぎる。それは自分の意思を確認するための作業であったように思われる。今回の出発に際して、スペインの詩人ガルシア・ロルカの詩が、彼の心境を映すものとして3度引用される。「行こう、去っていくために／行こう、到着しないために（95, 173, 175）」。2度目の引用では前半部と後半部が逆転し、最後には「行こう、到着しないために」だけが引用される。「去る」ことよりも「到着しない」という意思が、徐々に強調されていく。出発した先が到着ならば、そこでまた新たな生活がはじまる。だがシュナイダーがめざすのはそれではない。「肝心なのは、生活することではなく飛ぶこと（das Fliegen）である（172）」から。定住するのではなく、場所をはなれ現代という時代に距離を取ること。ポルトガルをはじめとして、これまでに彼はスペイン、イタリア、イギリス、フランス、デンマーク、スカンディナヴィアの国々に滞在した。ドイツ国内で移り住んだ都市も多い。彼は故郷なきものでありつづける。

シュナイダーは肉体の衰弱から、生命の終りがそれほど遠くないことを予期している。死は絶望を意味しない。「あなたの足元で永遠に眠る（166）」ことを祈る者にとって。別れは彼にとって自分の実存を肯定するものである。だからこの出発には、「別離の幸福がかかっている（172）」のである。

題名にあるバルコニーとは、シュナイダーにとって「毎年聖使徒ペトロとパウロの祝日に、クアガルテン前の草地で、物々しく空気を入れて膨らまされ、当地の楽団による勇ましいメロディのもとに飛び去って行った飛行船のゴンドラ（18）」を想起させるものであった。解体作業で手すりを無くし、空中を凝視するバルコニー（63）は、思い出の砂袋を落し（63）、時代のうえをゆれている（56）ゴンドラの姿に重なる。最後に彼が見たものは、かたちのない瓦礫だけだった（174）。すでにバルコニーは飛び去ったのである。

すべてを語り終えたシュナイダーも、飛行機上にあることを記し、本書は終結している。末尾に2つの日付がある。バーデンバーデン1957年2月17日／ウィーン1957年7月29日。出発点であり次の着陸点である。彼の生きる限りこの旅は続く。

Text Reinhold Schneider : Der Balkon. Aufzeichnungen eines Müßiggängers in Baden-Baden. Insel Verlag Frankfurt am Main und Leipzig 2000

参考のため各章の表題を記す。

刑を宣告された家（Das verurteilte Haus）

見守る者（Der Zuschauer）

ビスマルクとラサール（Bismarck und Lassalle）

そして再び観客は（Und wieder der Zuschauer）

家の受難（Passion des Hauses）

訪問（Der Besuch）

飛んで行け（Fliege Fort !）

引用文中の数字はテクストのページをあらわす。

〈略記表〉

Franz Baumer : Reinhold Schneider. Colloquium Verlag. Berlin 1987 (RS)

Hans Urs von Balthasar : Nochmals – Reinhold Schneider. Johannes Verlag. Einsiedeln, Freiburg 1991 (NRS)

Reinhold Schneider : Verhüllter Tag. Herder. Freiburg 1960 (VT)

Franz Anselm Schmitt (Hg.) : Reinhold Schneider. Leben und Werk in Dokumenten. Walter-Verlag Olten 1969 (LW)

Ingo Zimmermann : Reinhold Schneider. Weg eines Schriftstellers. Union Verlag Berlin 1982 (WS)

〈注〉

1．テクスト末尾、マイヤーのあとがきにある言葉。
"Es geht um das Glück der Abschiede". Nachwort von Pirmin A. Meier. S.180

2．RS S.72

3．NRS S.287

4．償いは果たされるか —ラインホルト・シュナイダーの『タガンロク』—
ドイツ文学研究33 日本独文学会東海支部 2001年 S.149～162
心うちのめされ目標に達する —『フォン・シャンタル夫人の別れ』—
Flaschenpost Nr.24 ゲルマニスティネンの会 2003年 S.8～13

5．VT S.82f.

6．VT S.151

7．シュナイダーの戦中から戦後にかけての主張については、稿を改めて論じる予定である。

8．1946年－フライブルク大学名誉哲学博士号、ミュンスター大学名誉法学博士号。
1948年－アネッテ・フォン・ドロステ－ヒュルスホフ没後100年に際してのバーデン州政府記念賞。
1949年－マインツ科学アカデミー正会員、ロングフェロー－ゲマインシャフト賞等。

9．横塚祥隆著 『夜を通る暗い道 —ラインホルト・シュナイダーの闘い—』
ヨーロッパ文化研究 第1集 成城大学大学院文学研究科 昭和56年 S.130

10. VT S.142 シュナイダーは1941年教皇に謁見している。

11. Gertrud von Le Fort宛の51年6月27日の書簡で「これはわたしの人生でもっとも難しいことであった」と述べている。RS S.65

12. LW S.170. WS S.151には4月号とある。

13. WS S.159 Heidingsfelder宛の50年8月23日の書簡。

14. NRS S.287

15. バルタザールはシュナイダーの再論（注3の書）を上梓し、その冒頭に、彼の自伝的作品群は、ただ作品形態を提示して伝記的要素を省略するような解釈のありかたに論駁するためであったと述べている。NRS S.10f

16. 祖父はメゾンをホテルに昇格させた。シュナイダーは父の姓である。

17. 「決してエレガントでなく、同世代ライバルのホテルがもつ洗練されたセンスもない（13）」簡素な

メゾンを宿舎に定めたのは、ヴィルヘルム自身の性格と相通ずるものがあったからではないかとシュナイダーは推測する。それは一族や彼のヴィルヘルムに対する感謝とシンパシーを一層強めたはずである。

18. 阿部謹也著『物語ドイツの歴史．ドイツ的とは何か』中央公論社　1998年　S.205f
19. 「あの年月の栄光全体が、罪の上に、不公正な労働の上にあった（175)」と著者自身がテクストに述べている。S.175
20. VT　S.30の指摘。
21. 2年後の1878年には社会主義者鎮圧法が制定されている。
22. シュナイダーはラサールを「飛行する者（ein Flugsame－原文通り）であった（120)」と言う。シュナイダー自身の性行ともつながる興味深い指摘である。